報恩と現代生活

――明日をひらく報恩の道――

三田村　龍　全

日蓮聖人七百遠忌を近く迎えて（昭和五十六年）、日蓮宗はその理念的支柱を「報恩」に求め、信仰のすすめとして「合掌に光を」と唱導して報恩御遠忌の道を一路行進しています。「日蓮聖人第七百遠忌特別布教教案」には「昭和五十六年（一九八一）の宗祖御入滅七百年を迎えるに当り、本宗教師は全力をあげて御遠忌と、それを目標とする報恩のための布教活動に献身しなければならない。我等のとるべき報恩のための布教活動への姿勢は、末法濁世における法華経の行者としての宗祖の御生涯をあらためて一層強く現代社会に活かすことにある。」と力強く表現されています。そして管長の教旨は総長の諭達等に於ては、「鴻恩聖徳」「慈恩報酧」「無辺の聖恩」「鴻恩報謝」「洪恩」等、言葉をつくして、宗祖への報恩感謝の奉行を強調しています。

この「教旨」「諭達」の求めるものは、具体的実動（奉行）としては、その計画が巨費を要するとともに多岐にわたっていますが、その根本は、日蓮聖人の御生涯を貫いている「知恩報恩」の精神を明らかにするとともにその社会化としての報恩思想の展開、知恩報恩の実践的教化にあると思われるのであります。

報恩一般については勿論、日蓮聖人の報恩思想については、ここに詳述しなくとも、既に色々な論文によって明らかにされております。例えば前記の「布教教案」「日蓮聖人第七百遠忌布教資料集」をはじめ、「現代宗教研究」「教化の友」「日蓮宗新聞」等において、諸師研究者によって、色々な角度から貴重な意見が発表されておりますので、私

はここで改めてお話しをすることを避けようと思います。しかし話の順序として、若干ふれなければならないでしょう。

日蓮聖人は、父母の恩を一番重要視しておられると思います。御遺文をたづねますと、父母の恩を強調されている箇所は多いようです。

「聖愚問答鈔」(下)には「予父母の後世を助け国家の恩懐に報ぜんと思うが故に……唯知恩を旨とするばかりなり」或は「出家功徳御書」には「凡そ父母の家を出て僧となる事は、必ず父母を助くる道にて候なり」「されば出家となる事は、我が親をも助け、上無量の父母まで助かる功徳あり。」また「上野殿御消息」には「法華経を持つ人は父と母との恩を報ずるなり。我心には報ずると思はねども此の経の力にて報ずるなり」と述べられています。その他「上野殿御消息」には「一には父母の恩……二には国主の恩……三には一切衆生の恩……四には三宝の恩」の順序、「報恩抄」では「仏教をならわん者、父母、師匠、国の恩を忘るべしや」とやはり父母が第一位に出ており、「御義口伝」(下)にも「法華経を持ち奉るを以て一切の孝養の最頂とせり」とされています。参考に申し上げれば、「釈氏要覧」では「父母、師長、国王、施主」、「「心地観経」では「父母、衆生、国王、三宝」等、父母の恩が最優先におかれています。「開目鈔」でも「過去未来をしらざれば、父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり」とされています。ですから天よりも高く、地よりも厚い父母への孝養の道を強調されておられるのです。

父母は、社会協同体の基本的な倫理関係であり、自己と永遠の生命とをつなぐ血脈なのです。血統ともいわれますが、この言葉は、封建的な身分関係のニュアンスがあるようです。私自身、過去の自分を顧みる時、必ずしも父母に孝養をつくしたとは言えません。むしろ苦労のかけっぱなしであったと恥じ入る次第です。孝養は報じ難いものです。日蓮聖人は、このように呼びかけています。

「父母に孝あれとは、たとひ親はものに覚えずとも、悪しざまなる事を云ふとも、いささかも腹を立てず、誤る顔を見せず、親の云ふ事に一分も違へず、親によき物与えんと思ひて、せめてすることなくば、一日に二三度えみて向へと也」。子供がにこにこと語りかけてくれることは親にとっては、心すがすがしく、救いなのであります。

恩と現代の社会生活について考えてみましょう。現代の社会生活の中に「恩」は活きているでしょうか。

恩思想の低下は現代の様相の一つではないでしょうか。恩は考えたり理念的な世界での認識ではなく、実感における体認でなければ生活化しないと思います。「有難い」と思うことは、まず「有難い」と感得する事に基があるので

す。いくら恩を理論的に説いても、具体的に感性的に受容されなければ、生活の指導には つらなりません。

殊に現代は核家族化によって親との協同体が解消されつつあります。そこからはマイホーム的エゴイズムという、一種の家庭の孤立化が必然的に生れることでしょう。

また「断絶」とよく言われますが、これは親子の相互理解の欠落、相互不信、精神の不安定など、いろいろ心理的原因があると思われますが、時代のはげしい、急速な変化に速応しなければ生きられぬ若き人々と、その速度に応じかねる老いたる人との間に渡り難いミゾが生じるのではないでしょうか。いかにしてこの断絶を埋めることができるでしょうか。しばらく前、私は或るロータリークラブに招かれて、この問題についてお話した事がありますが、今日は略します。

さらに転勤移転などによる住所の遠隔化の問題もあります。親子の交流接触の機会が失われるわけです。そのために心の交流やいたわり、あたため合う愛情が次第に希薄になっていきます。また職業の多様化のため、子供が必ずしも父の業をつぐとは限りません。父の職業の世襲というわけにはいきません。

親子という血のつらなりはありながら、その人間関係が冷却化しつつあるのが、現代世相の傾向ではないでしょうか。そういう時代に報恩を説くには、どこに焦点を合わせたらよいのか迷うわけであります。われ今日在るは親のおかげであるが、その生み出された因縁の深さと生命への感謝の念を開かなければなりません。私の近所に親をうらんでいる人がありました。生んだだけだと彼は放言していました。貧困の中に生れた彼は、放り出された思いで流浪したとの事でした。或る時、私は彼に言いました。「あなたの一番大切なものは何か?」と問いますと、色々と考えていましたが思い当らぬようでしたので、私は言いました。「あなたの一番大切なものは、あなたの妻君でも子供でも財産でもない。もっともっと外にある。それはイノチなのだ。イノチほど大切なものはない。そのイノチは誰れから貰ったのだ」と。彼は胸を打たれたようでした。数日後彼は私をたづねて来ました。そして「生れてはじめて、おやじにシャツを送りました。寒くなりましたからね」と、目を輝かすようにして語りました。

あたたかい、いたわりの心の芽が出たのだと私も胸を打たれる思いでした。

私達は僧侶です。道を説く人です。その私達は、果して報恩の日常に生きているでしょうか。こう反省すると忸怩(じくじ)たる思いがいたします。日蓮聖人の門下として「如説修行」の道に生きているであろうか、「法華経の行者」たり得るか。勿論大聖人の時代とは七百年をへだてて、あらゆ

る生活様式、生活条件或は価値観も変っておりますが、「大聖釈尊出世の本懐を宣揚し、高祖大聖人の聖旨を広布」（諭達の文）する事に、何ほどの「正法広宣」に役立っているであろうか。私は地に伏してザンゲする外にないと、心をいつもいためております。

まず、果して真実の「出家」であろうかということであります。勿論沢山数万の僧侶の中には「出家」もあるであろうし、「出家」たらんと努力精進している僧侶もあるであろうが、私は河上肇の言葉に接し慄然たる思いがいたしました。その言葉は彼の著「獄中警語」の中の一句です。

「僧侶の子に生まれ、寺で育ったために、ついずるずるに坊主となりお経を読むようになった人たちよりも、当時の私はもっと自発的に、もっと本気になって、全心を宗教的熱情の炉火中に投じ去ったのである」という述懐です。宗教的熱情とは求道—真実なるものを求める捨身の精進に通ずるものであると思います。

また、私達の主・師・親である日蓮聖人は「曾谷殿御返事」の中で「末法の僧等は仏法の道理をば知らずして、我慢に著して、師をいやしみ、檀那をへつらうなり。ただ正直にて小欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ」と。また「松野殿御返事」には「受けがたき人身を得て、たまたま出家せる者も、仏法を学し誘法の者を責めずして、徒らに遊戯雑談のみして明し暮さん者は、法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借りて世を渡り身を養うといえども、法師となる義は一つもなし、法師の名字をめすめる盗人なり。恥ぢべし恐るべし」と、いわゆる「畜盗」の法師に、きびしい怒りと警告を発しておられることは、門下の者としては周知の事であります。私もまた「恥ずべし恐るべし」と頭をたたかれている一人であります。

明治時代から大正初期の思想界殊に宗教界に無教会主義で、熱烈なキリスト教徒であった内村鑑三（一八六一——一九三〇）は、彼の「信仰日記」で、痛烈に既成宗団を批判しています。この本は小さな本で、大正八年（一九一九）に出版されたもので、たまたま私は古本屋で見つけました。読むうちに私は驚きと感激に魅せられてしまいました。その中に次のような言葉が語られています。

「彼等は世俗的で佚楽的である。彼等は教会の事に熱心なる丈であって、神と正義と福音との事には至って冷淡である」つまり当時のキリスト教会は「信仰に於て浅薄で」あり「行為に於ては放埒」である事を指摘しているわけです。先に引いた内村の文章の中の神を仏と、正義を真実と、福音を布教と読みかえてみますと、私達仏教徒にとっても、きびしい警告として受けとめることができると思います。

また彼は「一生の間決して教会堂を有つまいと決心した。……大宗教家はすべて寺をも会堂をも有たなかった。法然、親鸞、日蓮すべて然りである。……若し我が会堂あ

りとすればそれは木の蔭である、或は碧空の下の縁野である」とも述べていますが、これは法華経の「如来神力品」の「若は経巻所住の処、若は園中に於ても、若は林中に於ても、若は樹下に於ても、若は僧坊に於ても、若は白衣の舎にても、若は殿堂に在っても、若は山谷曠野にても」に通じ、経巻のある所—法華経のある所はいづこであろうとも道場であり、仏の心を伝える場であると受けとめるべきであります。

しかし、現実の既成仏教々団は、荘大な殿堂寺院によってその権威を示し、僧侶は布教伝道の人というよりも、その殿堂寺院の経営マン化しつつある事は否定できないでしょう。内村は更に酷烈な言葉でこう述べています。「仏教滅亡を叫ばざるを得ない、今や日本の仏教徒は生ける霊魂を救ひ得ずして死せる肉体を争ふのである。寺は今や一の葬儀会社として在るに過ぎない。憐れむべきは仏教の末路なる哉」と。

このように考えてきますと、現代僧侶殊に報恩の真実に生きなければならぬ日蓮門下としては、七百遠忌を迎えるに当って、まず自らを赤裸々に反省ざんげし、姿勢を正さねばなりません。西欧の古い諺に、「僧侶の言う事をなせ、する事をなすな」とありますが、僧侶不信へのいましめとして、私は考えさせられずにはいられません。

仏のことを「世尊」と申しますが、世尊とは「世の尊敬を受けるに値いする人」という意味です。仏道に生きる私達は、正に「世尊」の人間像に近づくために、報恩の道を歩む行者として、明日へのたゆみなき精進に生きなければなりません。その精進の過程に於て、自からを創造し、昇華するものと思います。私達人間の生涯は死にいたる過程の中に生きているのです。

現代の不安は報恩の危機を招いているのではないでしょうか。報恩を思ふ前に、まず自から、人類自体が恐るべき危機の中にどう生きるかが問われている時代とも言えるのです。「三界は安きことなし、なお火宅の如し」ということで、人間は本来不安のかたまりで、不安の中に片時の安堵にほっとしながら一寸先は闇の中に生きているわけです。

神谷美恵子女史はその著「生きがいについて」の中で、不安を語っています。今、私の手元のメモを読んでみます。

「実存的不安には三種類がある。第一は死の不安、第二は無意味さの不安、第三は罪の不安である。……これらの不安は人間のおかれている状況如何にかかわらず、生存そのものに属している。……むしろ人間はただひとりでこの不安に対決しなければならないのである。」こうした不安は人間が生きている本質に関することでありまして、仏教の説くところの四苦八苦と同じように避げ難いものであります。「人事をつくして天命をまつ」とか、「人間万事、塞翁か馬」とかいうアキラメに似た対決では解決するもので

はありません。

こうした「実存的不安」のみならず、時代による不安が、私達の周囲をつつんでおります。「仏法を学せん法は先づ時をならうべし」とは日蓮聖人が「撰時抄」の冒頭で述べられた名言ですが、その「時」は、いわば歴史的実存ということになろうかと思います。

現代、私達の生きている日本（のみならず地球）は重大な危局にさし当っていると言えるでしょう。どこかで、こういう文章をみたことがあります。「我々の乗りこんでいる宇宙船、地球号は無惨な姿をさらした船である。積み込まれた資源は限られ、廃棄物はたまる一方、しかも乗客は増え続け」ているというのです。「人類は誕生以来二百万年にして、初めてといっていい危機の前に立」っているとも書いてありました。その危機の内容は、複雑多岐で一言で、言いつくせるものではないでしょうが、例えば、次のような提言があります。「二十一世紀はじめの日本の人口は一億三千万程度と予想される。この時代には人口のふえ方はいまよりずっと緩やかになるが、増加はまだつづく。日本の人口がおよそ一億四千万で静止の状態になるのは二十一世紀半ばのことであろう。……わが国の国土はおよそ三十七万平方キロメートルだが、山地が多く、可住面積は三〇パーセントにすぎない。……土地は限られた資源である。……二十一世紀はじめまでに人口がふえれば、そのねぐらをどうして確保するかが大きな問題となるだろう」（「二十一世紀への提言」・朝日新聞、昭五十三・一・二十五）生きるということは住むことによって保たれるのです。つまり生きる空間が確保できなくなったら、存在ことは不可能な状態になるわけです。

ただにそれのみではなく「国連の軍縮討議で、米代表のサイミントン上院議員は〝米国は広島原爆の六十一万五千三百八十五発分に相当する核兵器を現在所有している〟と述べた。……広島の原爆が一個で十万人を殺したとすれば、米国の核兵器は六百十五億の人を殺せることになる。世界の人口を十六回殺せる量だ。米国の外、ソ連に二千六百発、中国に二百発、英国に一九二発、フランスに八十六発の核兵器があるという推定もある。……死を間近にしてこの偉大な哲学者バートランド・ラッセルはこう語っている。〝人類に未来があるか、あるいは破滅か。その解答の出ないまま私は死んでいく。ただ私の最後の言葉として遺したいのは、人類がこの地球に生き残りたいと思うならば、核兵器を全廃しなければならない〟」（朝日新聞、「天声人語」、昭四九・一〇・二三）という報告もあります。人類に明日があると安心できましょうか。

また、現代科学技術文明の支えであり、私達の日常生活のエネルギー源となっている石油は「今後、残された石油を成長率ゼロとして使いつづければ、あと三十三年でスッ

カラカンになる」とも言われております。

そうした危機と不安を孕みながら、現代の科学技術は全地球上に公害を振りまいています。既に日本は公害列島ともいわれていることは御存知の通りです。

正に末法五濁の集結した姿ということが出来ます。殊に公害病によって、死に瀕している人、病苦に全身に負うている人――サリドマイド児、イタイイタイ病或は水質汚染による生命の危機に追い込まれている人々はわが死を眼前に見る思いで、生きることにしがみついているのです。こうした人々にとって生きるとは苦痛そのものであり、果して生きていることへの感謝などがあるでしょうか。生かされているいのちに感謝する事を説教することは容易ですが、ここの人たちには恩恵があるでしょうか。

ゲーテは「よしどうあろうとも人生はよいものだ」と述べているそうです。日蓮聖人は「佐渡御書」で「世間の人の恐るる者は、火災の中の刃剣の影と此の身の死するとなるべし。牛馬なを身を惜しむ、況や人身をや、癩人なお命を惜しむ、いかに況や壮なる人をや」といのちを惜しむ人間を描いています。死の不安と闘いつつなお生を願うのは人間ではないでしょうか。

「全身に転移したがんのために、四十四歳の若さび死んだ細川宏氏（解剖学者）は死の直前まで、石に咬りついても早く治らねばならんぞ〃と書き綴けた。……感動的なのは、氏が死を覚恩しながらもなお病魔とのたたかいをあきらめず〃生命の尊厳〃を信じ、それをうたいあげたことである。……一息吐くにも精一杯の力がいるという絶望的な病苦の世界にあっても〃苦痛のはげしい時こそ、春を待つ細い竹のしなやかさを思い浮べて、じっと苦しみに耐えてみよう〃と書き残している。死に直面しつつなお生きようとする人間の切なさを思う。生きられなければ、死をどのように迎えるか―再生を望む強烈な宗教的希求がある。」（天声人語、昭五三・一・二九要旨）

この心は死を超えて生きようとする来世への希求にはげまされているのかもしれません。こうした状況の中でこそ、人間は生きる事の尊さを本当に悟ることができるでしょう。

私もかつて若年二十五才の年末、病にたおれ、死に直面しました。その病床の中で私は、「わがいのち、わがものにあらず」と、一種の悟りに近い思いに打たれました。この尊い苦痛の中から、生命への感謝、生きる喜び、が生れてきました。生きる喜びを求め、生とともにある希望に光を求め、生きる歩みの中に自分の可能性を充実させようと努力する……明日へのいのち――そうしたあこがれが心の中で躍動しました。目には見えなくとも、たしかにある「いのち」への感謝、生命の尊さへのおどろきと感謝は人間が人間として生きるための根元的な開眼なのです。生命への報謝の念はここから生じ、ここに芽生え成長するもの

であると思います。「一生空しくすごして、万歳悔ゆることなかれ」とは日蓮聖人の有名なお言葉ですが、与えられた生命―しかも本質的には「私有財産」でない生命に報いる生き方は、無駄のない生命の営みであり、満たされた人生の勝利であると思います。こうした生き方は、生命への報恩ということができます。いのちを惜しむという単なる動物的本能の次元ではありません。それは、いかなる苦悩痛恨の中にも生きぬこうとする意欲の基であり、絶望とのたたかいなのです。生きる喜びとたたかい、生かされている感謝―この喜びとたたかいの意欲と感謝には未来にむかうものがふくまれており、たえまなき前進なのです。

仏教は生きながら、しかもまた死してなお成仏の可能性を約束しています。生きてなお可能性の未来明日への光を仰ぎ、死してなお成仏の安心を期する教えなのです。その道を求め精進することは仏者の道であり、仏恩に報ずることなのであります。日蓮聖人は「四恩鈔」で「仏宝法宝は必ず僧によって生ず。……仏法有りといへども僧有て習い伝えずしば、正法像法二千年過て末法へも伝はるべからず」と僧の使命とその使命に生きる僧の恩を明らかにしておられます。

法華経に「開示悟入」とありますが、その「開」とはノックすることと考えられます。人の心の窓をノックし、その意トビラを開き、光を照らすことでしょう。私達は「如日月光明」の自からを創(つく)らなければなりません。他者に向って徒らに報恩を説くことよりは、まず自から「能除緒幽冥」の奉仕供養に生きる報恩の人たらねばならないと深く思うわけであります。

報恩に生きる心情について、しばらく考えたいと思います。報恩の心は、人間存在のもとを知ることからはじまります。因縁とよくいわれますが、これも、もとを知る心によって領解されることであり、由来を知ることであります。

報恩者としての人間存在の生きる姿勢を、ここでは一応七つに分けて考えてみましょう。

1、人間はあらゆる力作用の中でいのちを支えられている存在です。勿論、このことは存在の一般的規定ではありますが、このことを明確に認識する力は人間にしかありません。「あらゆる力作用」とは別の言葉で言えば、「諸法」に当ります。日蓮聖人は「諸法とは妙法蓮華経という事なり」(諸法実相鈔)とも申されています。

2、人間は「おかげさま」の中にまもられ生かされているのです。日本人は日常の挨拶で、「おかげさまで」とよく言いますが、それが慣用語で、深く反省されていません。それの宗教的反省を深めることによって「知恩」の心が開かれるものと思います。おかげさまはありがとうと感ずる事と表裏一体であります。

3、先祖あっての自分であり、自分もまた先祖の一分である事を自覚すべきです。最近は、アレックス・ヘイリーの「ルーツ」(ROOTS)という小説から「ルーツ」ばやりですが、いわば「根ッ子」ということでしょう。日蓮聖人は「上無量の父母」と表現されています。すばらしい言葉です。説によりますと、二十五代さかのぼると先祖の数は三千三百五十五万四十四百三十二人になるとの事です。三十二人の「二人」は、直系の両親二人に当るわけです。

4、職場・職業あってこそ今日の生活であることは言うまでもありません。昔は職場は主従の関係によって、しめつけられていましたが、今日は労働契約で雇傭の安定が保護されています。その職場に生涯を托する人もあり、その職業を天職として、生き甲斐の生活をみたすもの或はかりそめ生活の支えの人もあるでしょう。しかし、その場、その時こそ現実なのです。現実以外に人生はありません。その職業によって成立する職場にあって、私達は貴重ないのちを、そして再びかえらない時間を消化しているのです。職場と職業は、仏教で言うところの「主の恩」「一切衆生の恩」が総合集中していると見ることがもきます。職場の階制は、必ずしも支配の関係のみでなく、共通の利害を守る体系と考えられます。しかし労働組合運動は、労働者の集団利益とよりよく生きる権利を守るための自由と権利と義務の組織です。その人の属するサイドが資本家側であれ、労働者側であっても、それぞれが、その側の集団の力の中で生きのびているのです。その限り、人はいかなる職場の職種であっても、孤独ではなく、衆と共に毎日の営みがささえられているのです。集団的結合性のうすい職業であっても、例えば農民の場合などは、農地改革によって、旧来の小作制度から解放され、各人がそれぞれ自作農として独立営業であり、一国一城の主の如き有様ですが、市場という生産品の集散機能によって生活が左右されています。市場と形成する集団の中に経営の運命がにぎられているのです。集団は人間にとってめぐみであるとともに加害者である場合もあります。人は人にとって人であるとともに猛獣である場合があると同じことです。それでも、その複雑な社会関係や人間関係から離れては人間として生きられないのです。トンネルもあれば広野もあるでしょう。要はいかなる側の生活者であっても、それぞれの集団の保護から毎日がまもられている事は事実です。一切衆生の恩とは、その社会体制のいかんによって色々の変容はあるものの、独りでは生きられない、生きられることへの感謝につらならなければ不憐と憂悶の暗い人生しかないのです。一日は夜ばかりでないのです。人生もまた朝があるのです。

5、社会生活、家庭生活は、人間関係のいたわりにまもられているのです。「期待される人間像」（昭四一・一一・一六）の第二章で家庭について「家庭は愛の場である。」家族は基本的には愛の場である。愛情の共同体である。「今日のあわただしい社会生活のなかにおいて、健全な喜びを与へ、清らかないこいの場所となるところは、わけても家庭であろう。」と述べ同時に教育の場であることに及んでいます。愛は思いやりによるいたわりの心となって親子兄弟を結びつけています。親は報いを求めぬ恩愛の情によって、あらゆる犠牲と苦難に耐えて子供の成長とともに生きる喜びをしっかりと胸にいだいているのです。日蓮聖人が、父母の願いにそむいて法華経に生きぬかれた事は、「棄恩入無為　真実報恩者」の実践でした。しかしその反面、遂に法華経に帰依した両親は、子供とともに、子供の住む心の世界に、その生涯をまかせて悔ない親心であったと私はひそかに思います。

6、一切のめぐみは与えられたものです。今日生きることは、自分の努力によることは勿論ですが、目に見えぬめぐみの絲によって、生涯は織りなされているのです。半杓（しゃく）の水といえども惜しむべしとも言われています。めぐみは余りにも日常的ですから、私達は不感症になっていますが、一歩ふみとどまって反省する時、私達は全くめぐみの中にまもられ生かされているのです。そして自分もまたその力に応じて社会生活の中でめぐみの力とならなければ、喰い逃げの人生です。めぐみに感謝する時間がなかったとは言いわけにはなりません。生理的反射運動のみならず、精神的反射能力をもつことこそ、人生を深める報恩の道に直参（じきさん）する。そこに敬虔な生活が開かれるのだと信じます。

7、明日をもっと充実しようとはげむことは、生命の久遠えの信仰だと思います。昨年十一月頃、私は宗務院の土曜法話で、二回に亘り「明日あるを信じて今日をはげむ」という題でお話をいたしましたが、常に新たに生きる智慧をみがかなければ、消費の毎日になってしまいます。今日を空しく生きることは、貴重な生命への反逆なのです。明日は、明日こそはと思うことは、或る意味では一種の慰めかもしれませんが、明日は、だれにもわかりません。力いっぱい今日を生きるところに明るい明日があるのだと思います。力いっぱい生きる喜びこそ、生き甲斐ではないでしょうか。このようにせいいっぱい生きる人は、生きているという平凡で当り前の事が、平凡でも当り前でもなく尊く有難い今日の自覚を持ち、積極的な日々を積み上げることが出来ると私は強調したいのであります。このことは生命への報恩ということができます。まことに「今日、いのちあるは有難く」なのであります。

私達は教師として、本来布教師なのです。専任布教師とか護法布教師、常任布教師、特派布教師など、色々名称がありますが、それは一応任期のある役名でありまして、私達は住職であると否とにかかわらず、教師の任務は布教伝道にあることは言うまでもありません。現時点では知恩報恩を根幹とした布教宣布が、宗門的に要求されています。宗門とはいわば、具体的には同信の組織体ですが、布教は、その時代に応じて広い意味で人間的要素の欠落しているものに光を当て、人間教育をすることであると思います。

私は知恩報恩を根幹とした布教について五つの目標を立ててみました。その概略を申し上げますと

1、血ぬられた御生涯を貫く報恩精神を、日蓮聖人の伝記を通して必ず語らねばなりません。この「語り」は、英雄崇拝的であっては、かえって未信者の反感をそそるおそれがあります。日蓮聖人に直接触れるがごとき畏敬の念によって、聖人に近づき、自からの人柄を高める意欲を導びき呼び出すものでなくてはなりません。それは大聖人との出合いなのです。

2、法華経を生活指導に生かすことは、宗学とは違って法華経の中に生きる精神の糧となる油田を発掘するような思いです。法華経を通して魂のエネルギーを蓄積することでもあります。

私は昨年でしたか、奈良の西の京の方へ旅行にいきました。古仏を拝みながら文化の歴史にふれる喜びでいっぱいでした。ふと或る山深い寺に詣でました。するとその寺の庭のほとりに、可憐な草花が咲いているのが目にとまりました。住職にその名をたづねましたら「おだまきの花」との事でした。私はかがんで腰をおとし、しばらくその花の側を去り難い思いでした。その時、ふと光がさし込むように「ここに母あり」と胸にひびくものがありました。私の母は四十余年前にまだ若くして他界しましたが、私が幼い頃、母は私をつれて野山に花を求めてつれて行きました。すみれ、たんぽぽ、その他さまざまな野の花の側にかがんではその美を愛していました。その姿をいま私は奈良の古刹の庭で、自らの姿の中に見た思いでした。ここに母ありと心につぶやいた時、私は自我偈の「我常住於此」はこれだなと直観的に思いました。「私はいつもあなたのそばにいる」と読みました。法華経を漢字の音読だけではなく、生活的に自分の体認と通して読むことは、法華経を現実の力として読むことなのです。「色読」とはそういう広い意味もあると私は考えております。法華経の心を、大衆の心の中に移植していくつとめと努力と研究は、法華経への報恩であるといっても誤りではないでしょう。この努力精進はまた仏法僧（三宝）への報恩に直結するものとの自覚をしっかり持

つことが心がまえとして大切ではないでしょうか。

3、私達はお題目を唱えることの貴さに生かされています。「受持法華名者　福不可量」のはげましに毎日を明るく生きているのです。私達は唱題信行者として、運命の開展をねがい、日蓮聖人の御名前にちなんで明るく浄(きよ)くあるように自からを営んでいるのです。唱題の人はまづ「忍難」の人でなければにせものです。と同時に「慈勝」の奉仕に生きる情熱と社会道義感を心に燃やさぬ人は裏切者なのだと、私はいつも自分をいましめております。私達は病んだ時、その病の苦しみを忍びつつも、薬を求めます。或る特定の薬が効果があり、全快いたしますと、必ずその人は同じ様な病気の人に、その薬をすすめるものです。それはしらずしらずのうちに、忍難と慈勝になるのであります。「我もいたし人をも教化候へ」の聖旨にも添ふことであると信じます。唱題のすすめは口頭禅ではなく、唱題生活の感銘と体験の中からほどばしるものであるべきであります。

4、法華経の求める人間像を、もっと明かに把握する事は大切なことであります。こういう人になりたいと願ふ人間の在り方への志求であります。このことにつきましては今日の講演のプランに入っておりませんし時間もありませんので、別の機会にいたしたいと思います。ただここでは一つの提起としておきます。

5、日蓮聖人が「涙ひまなし」といわれた法華経広宣の情熱と魂の燃焼を思い、「毎自作是念」の悲願を、わが布教活動の念願とすべきであると思います。里見達雄氏の編集した「現代仏教聖典」には、法を説く心がまえについて次の様な「聖語」があります。

「弟子等よ、説教に浄と不浄との二つがある。自分の説教を人が聞いてくれればよい、聞いて喜んでくれればよい、喜んでそのしるしを示してくれればよい、と考えて説教するのは浄(きよ)からぬ説教である。然るに法は仏陀によって完全に説かれている、それは現世に於て、時をへだてずその報を受けることができるから実利ある教えである。またそれは人を正覚の境地に導く法である。自分の説教を聞いて、人がよく了解し、そのように行って欲しいと考えて、同情、憐愍の心から教を説くならば、それは浄(きよ)い説教である。」

私達は仏子として仏使の自覚に生きとおすことを誓願とすべきであります。

恩は生きる人間生活全般にわたって、すみずみまで浸透している一切のめぐみでありますが、それを、現代の社会で説く事は、容易ではありません。恩は頭の中で理解できても、報恩の生活を行為の中にあらわす事は、きわめて困難な諸事情にさえぎられています。それは個々の人間の問

題であるのみならず、社会全体の問題であると考えられます。

私は報恩生活の六波羅密を一応、立ててみました。六波羅密は言うまでもなく、仏教全般に通ずる実践倫理であり、仏道に生きる規範でもあります。

唱題は正行でありますが、現代の繁忙多端なしかも複雑な社会生活の中で、座り込んで、お題目を唱えている時間は、乏しいことと思います。その唱題―すなわち正行の信行実践を、日常生活の中で、どのように展開したらよいのか―この六波羅密を、しっかりと自覚して生活化しなければ無意味だと思います。自覚とは認識から信念への深化の道であります。

1、布施―心身ともに、奉仕の生活に生き甲斐を創ろう。

創ろうということは人にも呼びかけるとともに、自からへの誓いです。なりゆきではなく、自覚的に、積極的に心田を開拓しなければ為し得るところではありません。奉仕は身・口・意ともに、その報いを求めず、人の幸福に貢献することです。仏教者（宗教者）は、信施によって生活しており、その報酬はきわめて不確定で、その作務に対して一定の価格もなく、サラリーマンでもありません。労働力に対する経済的評価は不安定そのものです。悪い言葉で言えばあてがい扶持です。こちらの要求をぬきにした不思議な経済事情です。前近代的なものです。そういう生活態は、本来宗教者は、自己の労働評価をカンジョウに入れないことが本来の姿なのです。こうした在り方は、奉仕、献身、供養の生活であると言ってよいと思います。しかし現実的には、このようなキレイゴトではすまされぬ面があります。寺院の格差のきわめて大きいものがあります。宗門運営の局に当っている当局者は殆んど富優寺院です。宗門という名の下で、特に階級的な対立抗争は明かではありませんが、宗門は、下級寺院の法労に謝する行政を重視しなければなりません。このことは宗門今後百年をおもんばかった報謝活動であろうと思います。宗門自体が報恩の姿勢を示すべきです。子供が親に恩を謝するとともに、親（宗門）はまた子（下級寺院）の恩を思うべきであることを、私は重視したいのであります。対一般社会的な問題とともに私達をとりかこんでいる宗門内部の不合理に対しても関心をもたざるを得ません。奉仕の熱情と喜びに生きることは、なまやさしいことではありません。

2、持戒―仏祖を拝し生活を正しく子孫の師表となろう。

生活のリズムをまもることは、生活を律することです。信仰心のある人は必ず正しい生活が育つと思います。デカタンな放逸な生活は仏道に生きる道からは排撃されるわけであります。道を行ずる者と行せざる者との

分れみちは「憍恣の心を生じ放逸にして五欲に著する」ことにあると法華経には明示しております。私達は悲しいかな五欲に著する凡夫ではありますが、信仰を求め、信仰に生きようと努力する事によって、その五欲の煩悩から救われるのではないかと考えられます。さき程、私は正しい生活といいましたが、正しい生活とは、必ずしもはっきりわかりません。しかしあえて言えば、空しくない一日、悔のないその日その日を迎え送ることであろうと考えます。たのしく、はげみのある生活がそこに約束されるでしょう。子孫が誇れる先祖となることへの精進であります。親を尊敬できる子供に間違いはおこりません。私はその逆をゆく少年院に教誨師として奉仕しておりますが、母について彼等の一人がこんな作文を書きました。

「こんどは来ない（面会に）と思っても、やはり来てくれる。そして涙を流してても不平ひとついわない。そしてただ一言、信用しているからというだけだ。母、母といっても、これほどありがたいひとはこの世のなかで、私を生んでくれた母以外にはないと思っている。肥っているからだを、こんな遠くまで月一回ずつはこんで、面会にきてくれる、そんな姿を見て、こんどこそは頑張るぞという気持がわいてくる。」

少年院生たちが、その収容生活に苦しみ悩み、退院間ぎわ考えた自覚的持戒として、彼等は次のようなことを考えました。

「(1)忍耐力をつけよ
(2)自信をもって生活せよ
(3)もっとすなをな人間になれ
(4)節度ある生活をせよ
(5)みな仲よくしてゆくように
(6)仕事に打ちこめ
(7)仕事を身につけよう」ということでした。これらの七つの目標は、容易な道ではありませんが、彼等が更生を願って到達した持戒の集約した表現でした。

子孫の師表となることは、親の不断の精進する姿、子供を信じる深い理解と愛情にあると思いますが、その心の裏打ちの地金として、仏祖を拝する後姿の教ゆることであると思われるのです。

3、忍辱—苦楽思い合わせて、世のためわがため幸せの道をひらこう。

人の一生は苦楽のあざなえる縄の如くともいわれています。大聖釈迦の御生涯も果てしれぬ流浪の旅でした。日蓮聖人の御一生も大小の法難にいのちをかけた血ぬられた道でした。「人間に生をうけたる人上下につけてうれへなき人はなけれども」と「光日房御書」で述懐され、苦悩の人生に涙をそそいでおられます。マル

クス主義者として投獄された河上肇博士は歩いて来た苦闘の生涯を顧みて「たどりつき　ふりかえりみれば　やまかはを　こえてはこえて　きつるものかな」と詠じて、老残失意の余生をさみしく、六十八才で永眠しました。

仏教では慈悲を人間相互を結ぶ重要な心としています。慈は父、悲は母ともいわれていますが、その慈悲のあらわれが愛の行為であると、私は考えています。革命運動も自己をささげた愛の行為です。「衆生を慈念すること」に根本心情は通じているのです。法華経を通読して感ずることの一つとして、「大衆」「衆生」の語が非常に多いことである。衆と共にある法華経なのです。一切衆生の異の苦を受くることを、わが苦と受けとめる大慈悲心が隘れていることです。「立正安国論」を貫ぬいている精神は、共通の時に生き、共同の歴史的運命の下にあり、やがてはともに死んでいく大衆の幸せを願う慈悲であったのです。社会正義感なき宗教者は教団の中のダラ漢であり、宗教が金もうけの手段となってしまうと思われます。と同時に社会正義感に生きる心には必ず怒りがひそんでいます。怒りを知らぬ宗教者は世の中の改革と前進には、何の役にも立たぬと言うことができます。自己をささげた時間と空間をもつ——信仰者の純粋性と私は考えておりますが、仲々徹する事は困難な道であります。世界の大宗教家は、自己を滅して生き、その生きる過程に於て、真実の自己を完成したのでした。輝ける自己の創造です。これより外にない自分の開発なのです。ただ生きのびている生物体としての人間では、限りある生命の消耗にすぎません。

トルストイは、その「人生論」の中で「人間の生活は幸福に対する希求である。」とも「自分の生活はあげて悉く、自分の幸福を希う一念である」とも述べていますが、この「自分」とは何であるかということは仏教殊に法華経の人間像の探求をすることによって、明らかになるものと考えられます。

ひっきょう、世のためにその生きる場に応じて一身をつくすことによって、真実で、破れず、生き甲斐を満喫するわが幸せの道がひらかれるのです。自分をカンジョウに入れぬ生き方なのです。

4、精進—今日をはげみ明日への希望に生きよう。

宗教的に言えば、精進は求道の念の発露なのです。真実なるものを求めて、たゆまず前進することです。真理は論理的認識によって求められるものであり、真実なるものは生活の実態の中にひらめく智慧の世界だと考えられます。誰れでも明日のいのちは期し難いことは、言うまでもありません。

しかし人間関係は約束ごとによって、支えられていま

す。約束ごとは明日につらなるわけです。明日は、どうなるか分らないけれど、明日在りと信じなければ、一切の約束事は成立いたしません。それを「予定」と言い表わしております。文章にも未来形があります。

仕事や事業は明日を期しての計画なのです。いま迎えようとしている七百遠忌もそうです。何年先のことまで、人間は計画しその願望に向って歩みつづけるわけです。精進は明日に生きる魂のバネです。

日蓮聖人が「南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」と述べられたのも「末法万年広宣流布」というのも、すべて未来への願望であり信念なのです。

ヘルマン・ヘッセは「自分の生活は、踏み越えること、一段一段と前進していくことでなければならない」と言っていますが、紆余曲折の人生を耕し進むことは、人間に課せられた宿命ではないでしょうか。私達宗教者は冷い哲学論理ではなく、あたたかい人間交流の広野の中で、真実を求めてはげむことの喜びに生きる者であるとも思われます。外から強いられたことではなく、内から燃え出ずる魂の光であるのでしょう。精進を単なる道徳的な「はげみ」としてではなく、仏道修行として自覚してはげむところに「法悦」があり、「我常住於此」の仏と相まみゆることが出来るのであると私は思っております。

5、禅定—心しずかに人と和し、迷える人の光となろう。

私達宗教者は「光をかかげる人」でありたいと思いますが、むしろ現代日本の各教団自体が迷える集団ではないかと憂えざるを得ません。それは新しい時代への脱皮のためか、古老の権威と利害を守るためのものか、いわゆる草原の迷羊ではないかと色々考えさせられることは、皆さんとともにお互い様ではないかと思います。

一般社会情勢に目を転じてみましょう。まず情報過多の時代と言えるでしょう。マスコミ（魔巣込）の時代は、大衆の判断に混乱を生じ、取捨正邪に迷うばかりです。

コンピューター時代に込りました。人間の思考力は無視され、コンピューターによってはじき出される数字や感情のない異様な声によって、人間が支配される時代が既にはじまっています。「人間回復」などと叫ばれるのも、このような科学技術文化への反省と抵抗ではないでしょうか。また薬害の氾濫は恐ろしい不幸と兇悪な犯罪をまきおこしています。私は今、呼吸もみだれながら、この原稿を書いていますが、昨日飲んだピリン系の薬害で、全身がむくみ、呼吸も荒々しく、視力も怪しい状態です。サリドマイド禍などはその極端な実例です。魔薬類の大量密輸が時々摘発されますが、その被害はひろがりつつあるでしょう。その他数

えきれぬ程です。しかも、教育、経済、政治等の諸問題も、日本はいま重大な危局にあり、正に経済的な世界戦争に突入していると言うことができます。利害の対立抗争も甚だしく、日本丸は、今や台風の暴威の中にただよっている感があります。

こうした時代の中にあって「光をかかげる人」としての宗教者はどう在ったらよいのか、—これもまた大きな迷いであります。

私達は青年に将来への期待をかけたいのですが、宗教意識調査によると、信仰心がないということについて、日本の青年は74パーセントの高率を示し、無宗教の点では世界の中で群をぬいていることが報告されています。宗教の将来について青年への期待は、絶望的です。青年に対する伝道はどうすべきかは、重大な関心事でありますが、これという答は直ぐないようです。

青年のみならず、一般大衆はしづかにものを考える時間もなく、考えようと努力することも乏しいようです。静かに実相を思うことを法華経はすすめていますが、大衆はただ日々の営みに追われ、つかれた身をしづかに横たえるつかの間の休息に「自分だけの」安逸をむさぼっているかのようです。しかし例外はないとは言えません。私は一般的傾向について述べているのです。

聴聞（ちょうもん）などという言葉は忘れ去られています。しかし、社会生活にしても、家庭生活にしても、その生活の幸せの条件の第一は「和」であることに異論はないでしょう。自分の心が乱れれば、私自身が内面的に和を失った人間なのです。乱と和は対立しています。法華経に「諸の衆生を引導して、之（これ）を集めて法を聴かしむ」と説かれていますが、この経文と、自身に即して、主体的に読みますと「私は沢山の人々がそこに集まるように導き、その衆生を集めて、法を聴かせるようにはげもう」と読みかえることができます。

縁ある衆生が、心しずかな時間を持てるような時間と場所を設定する努力こそ、第一義的なつとめであるとしてよいでしょう。それは寺院教会の場のみではありません。そして心のしづけさを（正しい判断のもと）ひらき、心の安定の喜びをわかつことが求められると思います。

人生はひっきょう、トンネルみたいです。暗いトンネルから出るには目当てとなる光がなくては、なりません。その光となり得る自からの確立こそ宗教者の精進の目標であろうと思います。かかる自己の確立なくして他者への光たることは不可能である事は明かです。

6、智慧—喜んで仏の教を聞き、ゆたかな魂をきづこう。

智慧は六波羅密の総括です。智慧は智識ではありま

せん。智識に生命を与え、その活躍の導きとなる力が智慧なのです。仏者は、その智慧を求めて、不退転に生きぬくことが、第一条件ではないでしょうか。平易な道ではありません。私達はその嶮難の山を越えてゆくキャラバンと言えるでしょう。私は次に法華経の経句を提示しておきたいと思います。

「我れ過去無量却の中に於て、法華経を求めて懈倦あることなし。……「王、仙の言を聞いて歓喜勇躍し…身心倦きことなかりき。」とは提婆品の言です。また、「身心寂として動ぜず、以て無上道を求む」とは序品の言です。

智慧の累積は魂の内容密度を創造するものと私には考えられます。魂は無形無臭で、その実体はとらえられませんが、人間の存在とともに実存する価値の本体であります。

私が今から四十年ほど前に、子供の将来についての不安を愚痴った時、八十才のわが老祖母は、しづかに笑いながら「お前のいうことは親の煩悩だよ、人間は子供を生むことは出来ても、魂は生めないよ」と言いました。私は愕然と胸を打たれる思いでした。その後、年久しく経ってから「父親は自分の子供に目鼻立ちばかりでなく頭脳まで遺産として与えることができるが、魂だけは譲り渡すことはできない。魂は各人に新しく賦与されるものである」というヘルマン・ヘッセの言葉に接し老祖母の生きる智慧に驚倒いたしました。仏の教えを聞くことは、その耳と心をもたなくては不可能です。日蓮聖人には「吹く風もゆるぐ木草も流るる水の音までも、此の山(身延山)に妙法を唱へずと云ふことなし」でした。二宮金次郎は「音もなくかもなく常に天地は書かざる経をくりかへしつつ」と歌いました。ルーソーは「自然は大学なり」と述べております。

私達宗教者は、この天地の声の中に、仏の声を聴く耳と心を養ふとともに、法を語り、法をひろめ、魂を養い、「則ちこれ。已に諸仏の恩を報ずるなり」(嘱累品)の喜びと感激を以て、積極的に生きなければならぬと覚悟を一っそう新たにするものでありたいと念じる次第です。

仏者もまた大衆の一人であり「没在於苦海」です。その中にあって、明日への人生をひらく報恩に光を求めて生きたいと願いつつ、この講座を閉じることにいたします。

(昭和五十三年三月二日

日蓮宗京浜宗務区教師大会講演・於東京・瑞輪寺)